

インタビュー

まちをつくる「人」と「心」

たなかやすぞう
田中保三さん



70代 男性 神戸市須磨区在住

神戸市長田区にある自動車部品会社の取締役会長を務めるかたわら、「特定非営利活動法人 まち・コミュニケーション」(*1) 理事を務める。阪神・淡路大震災の際、会社の駐車場スペースをボランティアに貸したことがきっかけで、ボランティア活動や御蔵のまちづくりに関わるようになった。「義務感より損得、損得より感動が人を動かす」と信じて、御蔵のまちづくりに精力的に取り組む。2006年12月、会長を務めていた「御蔵通5・6・7丁目町づくり協議会」(*2) が、住民の意見の食い違いにより解散した。さまざまな人が関わるまちづくりの難しさを、改めて実感したと言う。『震災が残したもの1、5～14』でもお話を伺っている。

■御蔵の20年

—— 阪神・淡路大震災から御蔵の20年を見てきて、街の様子や人間関係で思うことはありますか。

田中 町づくり協議会（以下町協）が自治会と決裂した時に、町協はこれまでやっていた事業を自治会に引き継いで、今後一切手を出すなと言われたんだけど、最近、公園や集会所の掃除だけでも来てくれないかという話が出てきてる。

でもそれが「前言は取り消すから」と自治会から正式に言うてくるんじやなくて、役員のなかで個人的に言うてくるんや。それも僕に直接言ってこないで、他のまち・コミュニケー

ション（以下まち・コミ）のスタッフに言うんや。そんなふうやからな……。人間関係は、やっぱり難しいね。

—— 古民家の集会所(*3)は、今も自治会の管理なんですか。

田中 そう、でもほとんど使ってないな。使わなくとも、閉めたままやなくて風を通さなきやあかんと言うねんけど、そうすると「あれを持ってきたのは田中や」という話になるねん。

—— 古民家を持ってくることは、みんなで決めたんですよね。

田中 そういう話やったのに「あの時は反対できるような雰囲気やなかつた」と言われたり。

—— では、自治会との関係はあまり変わってない。

田中 変わってないな。けど、自治会が行き詰まっているのは間違いないやろうな。

—— 御蔵は新しく移り住んでいる人が多いと聞きましたが、昔の経緯を知らない人たちが多いことをチャンスにはできないのでしょうか。

田中 うん、若い人が街に関わっていける仕組みをつくらなあかんと思うのやけど、自治会というのは旧態依然たるもので、どんどん高齢化していく。そんな状態で新しい仕組みなんかつくれない。歳を取ればだんだんと活動できなくなるから、今は夏祭り、餅つき、暮れの夜回りぐらいしかやってない。もっときめ細かに活動しようと思ったら、若いボランティアを入れないとできへんわ。

行政側は、まちづくりにはコンサルタントを派遣すればいいと思っているのかもしれないけど、役所とコンサルと住民だけでやれるかと言うたら、やっぱりボランティアがいないとできない。行政はさかんに「住民主体のまちづくり」と言うてるけど、そんなもんはなかなかできへんわ。

—— 住民主体と言っても、動ける人が少ないと難しいですよね。田中さんが思い描いていた御蔵の20年後と、今の街の様子はいかがですか。

田中 確かにハード的にはきれいになったけど、ハード先行は厳しいわ。やっぱりソフトが入ってこないとあかんのやけど、御蔵は町協と自治会が揉めたことによってソフトづくりが大きく後退した。それは失敗やったな。揉めた時も、勢いで押し切るんじやなしにこちらが下がったんやけども、多分、彼らにそれが理解できていない。「役所から金を取ってきて、あいつらだけで分けている」という話になってくるから、もうどうしようもないわ。金なんかどっちか言うたら私財を出しているほうやで。だけどそんなことは見えへんからな。

—— 20年経っても「復興した」とは言えないのでしょうか。

田中 ハード的には復興しているけども、このハードで良かったんかと言われたら、ちょっとわからんな。生活の匂いがないとか、人の気配がないとか言われたら参るな。たとえば、密集市街地にはその良さがある。隣のお年寄りの家からテレビの音が聞こえてきて「野球を見ているな。なら元気やな」というのがわかる。そういう所では孤独死なんかまずない。その近さが嫌やという考え方もあるかもしれんけど、人の気配がなくなってしまったら、やっぱりええとは思へんな。人は人のみならず、物や場所ともつき合って、街を形成してきたん

やな。

何度も言うてるけど、まちづくりは、土木屋と建築屋だけのハード主体ではあかんわ。「人づくり」や「心づくり」がないとな。

—— そのためにはどういう方法があるのでしょうか。

田中 行政は、ハードをこしらえるコンサルには金を出すやんか。だからソフトにも金を出さなあかん。

—— 御蔵では、まち・コミやボランティアがその役割を担っていたんですね。

田中 補おうと思ってやっていた。我々も多少助成金はもらっていたけど、自治会と決別してからは、一切助成金を取っていないからね。

■被災地支援で思うこと

—— まち・コミは東日本大震災の被災地にも応援に駆けつけていますが、今の東北を見てどのようなことを思いますか。

田中 宮城で、商店街の会長で町会議員もしたる人と話をしたんや。

その人は仮設住宅に居るんやけど、自分の土地は海拔3、4メートルの所にあるんやと。それやったら元の土地に家を建てられるから「どうして早く建てへんのや、現場を見ながら考えないと、仮設でワーウー言うたってまちづくりなんかできない。仮設の家でもええから、あんたがここへ建てたらみんな寄ってくるから」と言うても、「自分が一番先に仮設から出るなんてできない」と言う。それなら住まいは仮設住宅に置いたままで、元の土地へ日参すればええと言うても「逃げたと言われる」と言うのや。

それはちやうねん。まず誰かが帰ってこないと、帰ってくる人間がいない。そやけどそこまで言わされたら、もうそれ以上は突っ込めない。本当は、首に縄付けてでも元の土地に連れて行きたいぐらいやけどな。現地に人が集まって議論する場が、直後すぐにも必要なんやけど……。

—— 元の場所でみんなで話し合わないと、神戸と同じようなことが繰り返されてしまうということでしょうか。

田中 そう、同じになってしまふ。

—— 被災地支援と言えば、出石（いずし）がちょうど水害から10年になります。まち・コミは今も出石で農業支援(*4)を続けていますが、この活動はまだ続けていくのでしょうか。

田中 出石は市民農園もオープンしたし、一応役割は果たしたんやけどな。僕は、人間の生活の基本は農業にあるような気がしてね。これを大事にせなあかんと思ってる。都会に出てくるよりも、田舎で生活したほうがよっぽどええと思う。自然は人の心を豊かにしてくれる。

—— では続けていくんですね。

田中 続けるつもり。それと、出石での活動はまち・コミの資金源のひとつやねん。もちろん、僕らもあちこちに講演に行って、もらった金は全部まち・コミへ入んのやけどな。

それだけじゃなく資金源をつくるなあかん。

—— 田中さんは、引退したら農業をやりたいと言っていましたね。

田中 やりたいのやけど、なかなか引退できそうにないな。

■いま関わっていること

—— 今日は、2014年5月に旧神戸税関メリケン波止場庁舎にプレオープンした「陳舜臣（ちんしゅんしん）アジア文藝館」に伺っています。田中さんはここの事務局を務めているそうですが、関わりのきっかけは台湾へ移築した古民家(*5)ですか。

田中 そう、あの古民家は、台湾の淡水にある和平公園の中で「一滴水記念館」という名前の施設になった。古民家が作家の水上勉さんのお父さんが棟梁として建てた家だった関係で水上勉さんの本を200冊くらいいただいて、その中で読めるようにしたんや。台湾のお年寄りのなかには日本語を話せて、日本の本を読みたいという人もいるんやな。

そこで「台湾と神戸というたら陳舜臣さん」と、陳さんの本もいただけないと突撃したんや。そうしたら、陳さんの奥さんが「主人も台湾出身なので、いいですよ」と、即返事をくれた。陳さんはご両親が台湾出身やけど、日本で生まれて、神戸を舞台にした小説を書いているんや。それが縁で、その後も陳さんが台湾に行く時に僕も一緒に行ったりしたんや。

それらの僕の対応が陳さんの奥さんに好印象を与えていたようで、息子さんに「困ったことがあれば田中さんに相談したら」と言われたんだと。その後、息子さんが陳さんの蔵書や資料の分散を防ぐため一ヶ所に集めたいと思った時に、僕に相談に来たのがきっかけなんや。

—— それで田中さんが事務局を引き受けことになったんですか。

田中 そう。陳さん自身も、自分が集めた本をアジアの留学生に読んでほしい、なおかつ、ここを日本の学生との交流の場にできたらええと言っていて。この文藝館はそういうことを目的にしているんや。

だけど、こういう施設の運営は難しい。オープン前に、芦屋にある谷崎潤一郎記念館の方から「入館料だけでは運営できない」ということを聞いておったんやけど、ここも入場者の数がだんだん寂しくなってきてな。

—— オープンにあたって資金の見通しはどうだったんですか。

田中 ここは、ビルの三階全部を無料で貸してくれるという話で、それなら光熱費だけだと簡単に考えてたんやけど、水道代なんか二万円ぐらいする。どうしてこんなに高いんやと思うたら、三階全部やから大口径になっていて、使わへんでも基本料金が高いねん。こんな計算に入れてなくってな。暑いからエアコンも使わないわけにもいかないし、電気代も月に4~5万円。金がかかって痛いわ。だからいろいろな催しをやって、お客様を呼ぼうとしていてね。

—— 田中さんは、御蔵、出石、東北や台湾と、いろいろな活動で忙しそうですが、そのうえさらに、この文藝館にも大きく関わっているんですね。

田中 関わってしもうてるなあ。ほんまにこれはもうえらいこっちや。

僕の県立長田高校時代の同級生にボランティアで大勢参加してもらっているし、神戸近辺の同年齢の陳さんファンも参加してくださっている。総勢20名余りで、遠くは大阪、京都、奈良、淡路からも。本当にありがたいことや。

■阪神・淡路大震災

—— 最後に、阪神・淡路大震災が神戸と田中さん自身に残したものは何だと思いますか。

田中 もう成長は限界に来ているんやから、前のように高度成長を求めるのではなく低成長の時代へと切り替えなあかん。けど、切り替えきれてない。

—— 神戸が、ですか。

田中 そう。我々が若い時にしたような、家を省みずに四六時中働くような生活なんて、もうしたらあかんのや。そうやってつくってきたものは、もちろん日本にとって非常に大きな功績はあったんやけど、それと同時に、ものすごいリスクも背負っていると思うのや。だからもうそんなリスクは背負わないで、もっと地球に優しい生き方をせなあかんと僕は思うのや。海をどんどん埋め立て、高層ビルの乱立で海から人間を遠ざけてきた。もっと肌で海を感じたいよね。子どもの頃のように。

—— それが地震でも見えてきたということですか。

田中 完全に見えたな。果たして、神戸の密集市街地を、新興住宅地と同じようにきれいに区画整理して本当に良かったんか。そうじやない、やっぱり長屋のあった所はそのかたちを保ちながら考えたほうが良かった。無秩序に並んでる高い建物なんかは要らん。

—— では、田中さん自身にとては何が残りましたか。田中さんは以前から何度も「地震で人生や考えが変わった」と話されていましたが、今もやはり同じ気持ちでしょうか。

田中 まったく同じ気持ち。財は減ったかもしれないけど、豊かなものをもらっているな。

—— 地震が起きる前の田中さんだったら、今のように文藝館に関わったり、出石や東北、台湾に行ったりはしていましたか。

田中 神戸に地震がなかったらしていない。地震がなかったら、自分の時間を他人のために使おうという気はあまりなかったやろうな。自分の時間のなかで、社員をどう動かすとか、会社をどうやって続けるかと、そんなことを思っていたやろうな。

やっぱり金やないと思うねん。心豊かにどう生きるかやな。

2014年9月13日

神戸市中央区 陳舜臣アジア文藝館にて

聞き手・石丸由紀子、久米麻子

*1 まち・コミュニケーション

正式名称は「阪神・淡路大震災まち支援グループ まち・コミュニケーション」。「御蔵通5・6・7丁目町づくり協議会」の支援から始まり、まちづくりや地域活動の支援を行う。2012年12月に法人格を取得し「特定非営利活動法人 まち・コミュニケーション」となる。

*2 御蔵通5・6・7丁目町づくり協議会

御蔵通5・6・7丁目の都市計画事業における住民の意見を、まちづくりに反映させるための話し合いをする集まり。2006年12月に解散。

*3 古民家の集会所

「御蔵通5・6・7丁目町づくり協議会」「御蔵通5・6・7丁目自治会」は「まち・コミュニケーション」のコーディネートにより、兵庫県城崎郡香住町に建っていた築120年と言われる木造建築の古民家を解体し、約一年半かけて集会所として御蔵への移築を行った。

*4 出石で農業支援

まち・コミは2004年10月の台風23号の際、被害を受けた兵庫県豊岡市出石町へ応援に駆けつけた。その後、出石の市民農園での畑づくりに関わるようになる。畑で取れた有機野菜の販売も行っている。

*5 台湾へ移築した古民家

まち・コミと御蔵住民による古民家移築計画の2軒目。福井県大飯郡の古民家が、1999年9月21日の地震以来交流のある台湾に運ばれることとなった。2004年の夏にボランティア主体で解体を行い、2005年末に台湾へ運搬。2009年6月より台北縣淡水鎮で建築工事が開始、同年12月に完成した。(まち・コミホームページより要約)